

エッセイ

ジャポニズム楽曲探訪記

光 平 有 希

日本を題材にした音楽作品、いわゆるジャポニズム楽曲ときいて、皆さんはどのような音楽を想起されるだろうか。一九世紀末にイギリスやフランス、オーストリアで開催された万国博覧会では、日本の産業製品、美術工芸品などが多数展示され、これらの万博が西洋におけるジャポニズム進展の火付け役を担ったことはよく知られている。この流れは、他の芸術作品と同様に同時代の音楽作品にも大きな影響を及ぼし、二〇世紀初頭にはフランスの作曲家ドビュッシーの交響詩《海》や、イタリアの作曲家プッチーニのオペラ《蝶々夫人》など、多数のジャポニズム楽曲が生み出された。これらの大型音楽作品は現在でも国内外で頻繁に演奏の機会を得ているものの、実は、万博を基軸にしたジャポニズム楽曲誕生より一〇〇年も前の一九世紀初頭から、西洋各国では日本を題材にしたピアノや歌による小品がまとまった形で数多く出版されてきたことはあまり語られていない。

日文研「外書の研究」プロジェクトでは、日本を題材として作られた楽曲の楽譜資料も「日本関係欧文図書」のひとつとして位置づけ、数年前より調査と資料収集に着手。日本の幕末か



図1) 偽ベートーヴェン作曲
〈ジャポニカ・ワルツ〉

ら大正期に該当する期間に西洋で刊行された作品、なかでも広く民衆に根付いた小品楽曲を主たる対象として研究を進めている。日文研所蔵楽譜のうち、古いもののひとつが一八一五年前後にロンドンで出版されたギルドン作曲のピアノ作品〈日本の調べ〉だろう。クラシック音楽史上の古典派全盛期に出版された本作は簡易なエチュード風に書き下ろされており、古典的かつ陽気な作風が愛されイギリスやアメリカで版を重ねた。同時代のオモシロ作品としては、かの有名な作曲家ベートーヴェンによる楽曲と騙った〈ジャポニカ・ワルツ〉(一八三〇年頃)が挙げられる。「ベートーヴェンも日本に着想を得て作品を残したのか!」と思わず顔がほころんでしまいそうになるが、残念ながら本作は、形式や作風、発表時期からも到底ベートーヴェン本人によるものとは考えにくい。これは、楽譜の大量販売を目標に据えた出版社が、買手の目を引くようにベートーヴェンの名前を附し、そしてキャッチーなテーマをタイトルに

据えて作品販売したものと思われる。当時、このようなケースは珍しいことではなかった。

それにしても、販売促進を念頭に置いた作品のテーマがなぜ日本なのか。一九世紀初期の西洋では、すでに「日本」「日本風」という言葉がそんなに浸透していたのだろうか。確かに、一九世紀ヨーロッパの新聞や雑誌では、「日本」に関する記事も多く目につくし、幕末から明治期にかけては芸人たちがオーストリアやイギリスなどの西洋諸国を巡業し、バラエティに富んだ日本風の興行



図2) フィッシャー作曲
〈女軽業師ボルカ〉

演目で現地の人びとを魅了した。その影響もあってか、一九世紀後半から二〇世紀初頭のジャポニズム楽曲では、単に「日本」を冠するだけではなく、興行師や軽業師をモチーフにした作品が多く作曲される。

また、「Mikado (ミカド)」というキーワードも見逃ごせない。この言葉を根付かせたのは、一八八〇年代に爆発的ヒットとなったサヴォイ・オペラ(サヴォイ劇場を中心に興行が展開されたコミック・オペラ)《ミカド》である。本作は、劇作家ギルバートと作曲家サリヴァンが組んだ作品の中で興行的に最も成功した作品であり、一八八五年三月一四日の初演以降、六七二回というロングランを達成した。当時のロンドンでは日本の風俗文物を見世物とした日本展が人気を博し、イギリスでは空前の日本ブームの真っ只中。日本風の登場人物たちが巻き起こすドタバタ喜劇を通して、当時のイギリス政府を風刺した《ミカド》はこのブームに乗り

た作品である。同時に本作は、ジャポニズムやオリエンタリズムのイメージ形成の一端を担った。時期を同じくして《ミカド》の劇中曲を身近に楽しむためにアレンジされた小品も多数刊行された。そのうちのひとつが、〈ミカド・ボルカ〉(一八八五年)である。様々なバリエーションがある本作だが、日文研が所蔵しているのは、イギリスで軽音楽作曲家・編曲家として活躍していたブカロッシがピアノ独奏用に舞曲としてアレンジした楽曲である。〈ミカド・ボルカ〉が発表された一九世紀後期は、オペラやバレエの作品がしばしばピアノ連弾や



図4) プカロッシ作曲
〈ミカド・ヴァルス〉



図3) プカロッシ作曲
〈ミカド・ポルカ〉

5

独奏のための舞曲としてアレンジされ、個人や小規模のサロンなどで身近にダンスを楽しむために用いられた。本作もその流れを汲むものであり、〈ミカド・ポルカ〉が作られた一八八五年には同じくプカロッシの編曲で〈ミカド・ヴァルス（ワルツ）〉〈ミカド・ランサー〉〈ミカド・クワドリル〉といった四形式の舞曲作品が発表されている。ちなみに、同時期にはイギリス以外でも『ミカド』にまつわる作品が多数輩出され、例えばフランスでは一八九八年にマルセイユに本社を持つフェリックス・エイドゥー社製の「ミカド石鹸」を買った人へ、リヨン出身の作曲家アーノルドのピアノ作品〈ミカド・ポルカ〉がプレゼントされた。

これまで紹介したのはほんのごく一部の作品に過ぎないが、一九世紀末までに発表された楽曲の多くは西洋舞曲の形式が主流であり、今わたしたちが「ザ・日本の音楽」と感じるような特徴（たとえば、「ドレミソラ」で構成される五音音階や、民謡などでよく用いられるビョノ節のリズム）は、ほぼ皆無と言って良いほど描かれていない。例外的に、シーボルトが日本滞在中に採譜した音やメロディーをもとに編曲した曲集『日本の旋律』



図6) ディットリヒ作曲《日本楽譜》
より〈落梅〉



図5) アーノード作曲
〈ミカド・ポルカ〉

や、お雇い外国人として日本の洋楽受容に貢献したオーストリア人ディットリッヒが邦楽和声や邦楽器の音色を編み込み作った楽曲《日本楽譜》も存在はしている。しかしながら一九世紀に刊行された楽曲の過半数は、実際の日本、あるいは日本音楽に直接触れたことのない作曲家の手によって生みだされたものだった。だとすると、そこには彼らが思い描く「日本」のイメージというものが滲み出ているのではないだろうか。言い換えると、一九世紀後半にこそ「ミカド」や「興行師・軽業師」といったキーワードが定着していくものの、それ以前の一九世紀前半ベートーヴェンの時代に、楽譜販売促進の一役を担うと目された「日本」とは、当時の彼らにはどのような存在で、どのように映り、さらに音楽でどのように描こうとしたのか、そうしたことが作品や、楽曲の背景に迫ることで見えてくるのではないかと思うようになった。日文研所蔵資料との対峙を通じ、筆者の好奇心は日増しに掻き立てられ、さらに古い資料や基盤となる思想から、その問いの答えを追求したいという気持ちは膨らむ一方だった。

二〇一九年春・夏季。少しまとまった期間イタリアで調査をする好機に恵まれた。なぜイタリアなのか。それは、一六世紀以降、日本情報に精通したイエズス会の情報はイタリア



図7) 収集楽譜の一例

の都市ローマに集積され、キリスト教の布教に端を発して天正遣欧使節（一五八二年）や伊達政宗による慶長遣欧使節（一六一三年）など日本とイタリアの交流が戦国時代以来まで遡ることができること。また、一九世紀以降、ほぼ時を同じくして国家の統一を果たした両国が文化や産業を中心に様々な分野で友好を深め、その端緒のひとつとして一八七三年の岩倉使節団もイタリア訪問をしていること。このような複数回に及ぶ日本人の訪伊や古くから蓄積された日本情報が、長崎を題材にしたブッチーニのオペラ《蝶々夫人》成立にも繋がる、独自のジャポニズム楽曲形成地盤を古くから築いていたのではないか、そう考えたからである。

春の調査は事前調査と位置づけ、主に現地の図書館や音楽院で目録調査を行い、ジャポニズム楽譜や楽曲の分析に必要な一次史料分布を把握した。夏の調査ではローマ大学を拠点としつつ、ローマ、ナポリ、フィレンツェなどイタリア中・南部の音楽院や文書館に通い、資料収集と並行して各楽曲の分析に取り組んだ。また、休暇日には北部のブレシーヤやミラノ、ボローニャなどにも足を延ばし資料を探した。いずれの場所でも、日本では想像だになかった

貴重な資料と遭遇し、各地が育んだ音楽のなかに息づく「日本」の姿を目の当たりにすることができた。

現地の音楽学・歴史研究者との深い交友から得た多くの学びや、今回収集した資料の詳細な分析結果は後稿に譲るとして、調査地では非常に楽しいトラブルの連続だったことを記して本稿の筆を置きたい。ある日、道に迷いつつ最寄りのバス停から三時間歩いて辿り着いた片田舎の教会文書館では、門前でおじいちゃんアーキビストが「ああ！東方から来たジャッポネーゼ！待ってたよ！」と抱擁しながら迎え入れてくれ、思わず泣きそうになった。また、とある音楽院附属図書館では何故だか楽譜のコピーを認めてもらえず、食事返上でひたすら五線譜に鉛筆で書き写すという修行に励んでいたところ、見かねた図書館の受付さんが連日オムレツを焼いて食べさせてくれた。このような温かい人たちに助けられながら、なんとか調査を終えることができた。この経験を糧に、なお一層、日文研所蔵ジャポニズム楽曲の研究探訪にもしっかりと邁進していきたいと意気込んでいる。

謝辞

二〇一九年八・九月のイタリア調査は、人間文化研究機構若手研究者海外派遣プログラムの支援により遂行することができた。海外調査中、業務を引き継ぎ爾々と作業を進めてくれた「外書の研究」プロジェクトの同僚、そして現地で新たな資料を見つけるたび興奮気味にメールで報告する筆者に遠隔ながらも的確な指導をしてくださったクレインス先生にもこの場をお借りして心からお礼を申し上げたい。

（人間文化研究機構・総合情報発信センター研究員（人文知コミュニケーション）／
国際日本文化研究センター特任助教）